第32回広瀬川創生プラン策定推進協議会 議事録

■ 日　　時：平成 28 年 12 月 27 日（火曜日）　10：00～12：00
■ 場　　所：仙台市役所本庁舎 2 階　第 3 委員会室
■ 出席委員：宮原 育子 会長、小祝 慶紀 会長代理、工藤 秀也 委員、後藤 淳 委員、佐藤 克彦 委員(代理:加藤 悠司 氏)、菅井 一男 委員、杉山 ふじ子 委員、高橋 勝利 委員、多田 千佳 委員、西大立目 祥子 委員、二本柳 基 委員、長谷川 裕寿 委員、深松 努 委員
■ 欠席委員：畠山 美帆 委員、幕田 浩之 委員
■ 事 務 局：仙台市建設局百年の杜推進部河川課
■ 議　　事：〇平成 28 年度 重点事業の評価について
- 広瀬川で遊ぼう
- 作並かっぱ祭り

〇広瀬川市民会議の運営体制強化　取組状況の進捗について
- 第 3 回広瀬川学校実施報告
- 広瀬川 1 万人プロジェクトアンケート結果について

■ 要　　旨：
- 平成 28 年度 重点事業の評価については、市民協働および広瀬川への関心高揚という重点事業としての効果が認められるため、次年度も継続して実施することが望ましいという評価で一致した。
- 広瀬川市民会議の運営体制強化に関する検討においては、従来より提携先候補としていた広瀬川 1 万人プロジェクトについて、同団体に対して実施したアンケート結果から、同団体の活動に積極的に活動している企業の PR や活動証明書の発行条件の拡大、実施時期や回数の再検討など、企業に対してメリットになるような形での実施方法の検討が必要であるという提言が、同実行委員会に対してなされた。
- 上記検討を進め、企業の一員として活動に参加した人が、個人として広瀬川の魅力や環境保全の大切さに共感して、広瀬川市民会議に加入するという動きにつながるのが理想的であるため、活動の意義や目的を、これまで以上に PR していくことが重要であるという提言がなされた。
- 広瀬川市民会議の運営体制の強化については、これまで「組織体制を充実させることによる強化」を中心に検討してきたが、イベント単位で組織提携をしながら「活動を活発化させることによる強化」という方向性についても議論がなされた。

■ 議 事 詳 細：

1.　開会

〇司会（安田課長）

ただ今より「第32回広瀬川創生プラン策定推進協議会」を開会する。

本日は、年末のお忙しい中、ご出席いただき感謝申し上げる。なお、畠山委員、幕田委員においては欠席とのご連絡をいただいている。また、佐藤委員においては、国土交通省 東北地方整備局 仙台河川国道事務所 調査第一課 調査係長 加藤 悠司 氏に代理出席いただいている。

2.　会長挨拶

〇宮原会長

平成28年もあと数日というところではあるが、今年も広瀬川創生プランでは様々な活動が実施されてきた。一方で、懸案である市民会議の組織体制強化についても、前回協議会において、いくつかの案をベースとしながら議論をすすめてきた。今回の協議会では、特に後者の市民会議の組織体制強化について、前回の議論をふまえて、さらなるご意見をいただきたいので、よろしくお願いする。

3.　議事

〇司会（安田課長）

本日は全15名の委員のうち、13名の方に出席いただいており、過半数を達しているため、本会は成立している。以降の議事の進行については宮原会長にお願いする。

〇宮原会長

まず、今回の議事録署名は五十音順で杉山委員にお願いしたいがいかがか。

＝一同了承＝

〇宮原会長

それでは、平成28年度重点事業の評価について、事務局から報告をお願いしたい。

〇事務局（杉井　広瀬川創生室長）

資料 1～3 に沿って、各重点事業の評価について説明。

〇宮原会長

今の事務局からの説明について、質問等はあるか。

〇二本柳委員

「作並かっぱ祭り」について、協働団体数が昨年度より減少しているが、何か理由はあるか。

〇工藤委員

作並かっぱ祭りの実行委員長を務めた。毎年、各企業や団体に協力のお願いをして回るのだが、例年以上に忙しく、十分に時間が取れず、いくつかの団体にはお声がけできなかった。協力団体の意識が薄れたというようなことではなく、単純に連絡が行き届かなかったことが原因であり、何分、人手不足の中で行っているので、大変申し訳ないがご理解願いたい。

先日、公益財団法人河川財団から、本イベントについて取材したいとの連絡があった。企業と市民、行政の協働事業の成功事例として、高い評価をいただいているようで、大変うれしく思っている。

○宮原会長

対外的に長く続いて、仙台市内、宮城県内にとどまらず、県外からも高い評価もいただけるイベントとなってきており、大変すばらしいことである。

その他、特に意見等なければ、重点事業の報告は以上とし、次の議事へうつりたいが、よいか。

＝一同了承＝

○宮原会長

それでは次に、議事「広瀬川市民会議の運営体制強化　取組状況の進捗について」、まずは「第3回広瀬川学校実施報告」について、事務局から説明をお願いしたい。

○事務局（杉井　広瀬川創生室長）

資料４に基づいて説明。

○宮原会長

今の事務局からの説明について、質問等はあるか。

○杉山委員

広瀬川市民会議と広瀬川1万人プロジェクトの交流強化を目的とし、始まった「広瀬川学校」であったが、今回で3回目の開催となった。前回、前々回の反省を活かし、運営や周知等の面で少しずつ改善することができた。特に今回は、1万人プロジェクトに参画している企業（建設技術研究所㈱）がCSR活動の一環として、準備や講師派遣等、中心的に運営に加わっていただけたので、非常によかった。また、芋煮会の準備においては、ノウハウを企業間で共有するなど、1万人プロジェクトの参加企業間の交流にもつながった。一方で、サケの遡上が予想外に少なく、郡山堰まで移動する必要があり、時間的なロスがでてしまったのが残念であったので、次回以降で同じような企画を実施する場合は、漁協さんとの連携も検討していきたい。

○深松委員

サケの遡上は、この時期（11月初旬）であれば、広瀬川のどこでも見ることができるのか。

○杉山委員

例年であれば、牛越橋まで遡上してきている。

○深松委員

サケの遡上が広瀬川の各地でみられるということであれば、1万人プロジェクトの秋の一斉清掃を、この時期に合わせてもよいのではないか。そうすることにより、今年は2000人近い人が清掃活動に参加してくれたが、サケの遡上についてもPRすることができる。

○工藤委員

1万人プロジェクトの実施日を9月の最終土曜日としているのは、「広瀬川の清流を守る条例」（1974年9月28日公布）にちなんでいる。しかし、春の一斉清掃は4月に実施している現状もあり、時期や回数については、検討する余地はあると考える。

○宮原会長

1万人プロジェクトの活動開始当時の、条例施行にちなんでという理念は大切にしながらも、参加者がより参加しやすい仕組みや、より楽しめる仕掛けを考えることは、プロジェクトの継続性という観点で重要である。

○菅井委員

ボートくらぶの最終日は11月3日（文化の日）としている。例えば、1万人プロジェクトの実施日をこの日に合わせることができれば、サケの遡上に加えて、貸しボートなども清掃活動と一緒に楽しめるようになれば、より広瀬川の魅力を体感できるイベントにできる。

○宮原会長

1万人プロジェクト秋の一斉清掃の活動時期について、11月上旬にすることで、清掃以外にも楽しめるイベントになるのでは、という意見が続いているが、事務局の見解はどうか。

○事務局（杉井　広瀬川創生室長）

サケの遡上時期はその年によって変動があり、例えば今年はサケ自体の数は多かったものの、広瀬川の水量が少なく、上流まで遡上できなかったこともあり、11月上旬であれば確実、とはいえないのが実情である。そのことも含めて、最終的には、1万人プロジェクトに実行委員会事務局のご判断に委ねられるものであると考える。

○宮原会長

報告書の中には、新たな清掃活動会場の有力な候補となりうるという記載もあった。秋の一斉清掃については、活動時期と場所（会場）の両面で、よりよいものにできないか検討していくのが良いのではないかと考える。

○多田委員

なぜ広瀬川をきれいにする必要があるのか、清掃活動の動機づけとしてサケの遡上についても事前にPRできれば、参加してくれる人にとっても、自分たちの行動がサケなどの生き物のためになっているんだ、という意識が芽生えるのではないか。そうすれば、次はサケを見に行ってみよう、といった広瀬川を訪れるきっかけになる。一斉清掃の時に、サケの遡上についても一緒に周知できれば、もっと多くの人に興味を持ってもらえるのではないか。

○杉山委員

実際に清掃活動当日は、受付や写真撮影等の事務作業に追われていて、そういったサケが遡上してくる、といったことを参加者に周知するというところまで手が回っていなかった。多くの人が関わる貴重な機会なので、次回以降、広瀬川の魅力について参加者に発信できるようなことも考えたい。

○宮原会長

いろいろと検討することによってもっと素晴らしいイベントになる可能性を秘めている活動であるといえる。ぜひ、今回の議論については、1万人プロジェクトの事務局にも情報共有していただきたい。

その他、特に意見等なければ、本議事は以上とし、次の議事へうつりたいが、よいか。

＝一同了承＝

○宮原会長

それでは次に、議事「広瀬川市民会議の運営体制強化」について、前回協議会の提言を受けて、広瀬川1万人プロジェクトに対してアンケートを実施したので、その結果も踏まえて、事務局より説明をお願いしたい。

○事務局（杉井　広瀬川創生室長）

資料 5 に基づき、スライドを用いて説明。
（要旨）広瀬川 1 万人プロジェクト参加企業の、取り組みに対する意識は様々であることがアンケートより裏付けられたため、まずは積極的な企業との部分的な連携を進めていってはどうか。

○宮原会長

広瀬川市民会議は広瀬川創生プランの実行部隊であり、その活動を活性化させるために、これまでも一斉清掃などで連携実績のある、広瀬川1万人プロジェクトの力を借りることも視野に入れる必要があるのではないか、ということについて、これまでも当協議会において議論を深めてきた。それを受けて、広瀬川1万人プロジェクト参加企業に対して、アンケート調査を行った結果についてご報告いただいたが、まずは、このアンケート結果について、ご意見やご感想があればお願いしたい。

○多田委員

アンケート結果からは、実に様々なことが読み取ることができる、という印象である。アンケートの中で、「清掃以外の活動に対して、企業全体としてのメリットが少ない」という回答があったが、逆にどういったことがあれば企業全体のメリットにつながるのか、といったことが重要になってくると考える。また、広瀬川市民会議の人たちに対しても、何かしらのメリットが生まれるようにすることも大切である。例えば、専門家ではないので詳しいことはわからないが、活動への参加に応じてポイントを獲得でき、それらを地域通貨として仙台市内で利用できるような仕組みがつくれれば、双方に対してのメリットになるのではないか。

○深松委員

地元企業は社長がやるぞ、といえば動くことができるが、支店企業は会社としてボランティア活動等に参加する場合は、必ず本社に許可をとらないといけない。例えば、創生プランに関わるイベントに参加している企業は「アイラブ広瀬川応援企業」として認定し、仙台市のホームページ上で公開するなどができれば、仙台市と一緒に取り組んでいる活動、ということで本社にも説明がしやすいのではないか。そういったことが実現できれば、それは企業にとってのメリットになるはずである。実際に、とある企業に1万人プロジェクトの活動について紹介したところ、もともと地域へ貢献する方法を探していたようで、前回の一斉清掃にも参加して頂いている。仙台に支店を置く企業からのニーズは確実にあるので、それにこたえられる仕組みづくりができれば、より参加しやすくなるのではないか。

○後藤委員

さきほど、地域通貨という提案があったが、どちらかというと、同じような仕組みは過疎化の進む地方の活性化等の目的で実施されることが多く、仙台のような都市部ではなかなか実現が難しい。活動に参加して得られたポイントを利用すると、市が提供する行政サービスがお得に受けられる、というような市の中で完結できるような工夫が必要である。

現状は、1万人プロジェクトは建設関連企業が中心の取り組みになっているが、「広瀬川は仙台市の宝である」というのは共通認識であるはずで、それをどのように伝えていくかが大切である。

○西大立目委員

1万人プロジェクトは建設関係企業が多いということだが、広瀬川、つまり水なわけだから、食品や健康、化粧品関係の企業にも参加してもらえることが理想である。まちづくりに貢献しているというステートメントとなるような仕組みをつくれたらいい。さきほどの、広瀬川学校の実施報告にもあったように、企業のCSR活動を市民にアピールするための手段となっていければよいのではないか。

○二本柳委員

広瀬川市民会議を継続的に支えていくことを考えると、やはり個人、人材がベースになっていくはずである。そのためには、企業の社員としてCSR活動に関わる中で、興味をもち、意識が向上してきた個人が、今度は市民会議の会員となって、力を発揮していく、というような流れできることが理想的である。1万人プロジェクトを企業の活動としてとらえるよりは、それをきっかけとして参加した個人が広瀬川の魅力を感じ、そこから個人の活動へ転換していくという、取り組みになっていくのがよい。

○工藤委員

具体的に、どのようなことをすればよいか。

○二本柳委員

先ほどの広瀬川学校の実施報告の際に、多田委員が発言されていたが、自分たちの清掃活動が広瀬川の魅力づくりに貢献している、ということが実感できるような体験を積み重ねていくことで、広瀬川に対する想いも変化し、個人としての活動へ転換していく流れにつながるのではないか。

○菅井委員

企業から見るとCSR活動ととらえられるが、社員側からすると、会社から強制的に参加を促されるだけでは継続的な活動につながらないため、何か楽しみややりが感じられるような工夫が必要である。例えば、1万人プロジェクトでは年2回一斉清掃をしているが、宮沢橋会場は、(1万人プロジェクト発足当時に比べて)かなりきれいになってきており、参加人数に対してゴミが少なく、清掃活動にやりがいを感じにくくなってきている。そこで、年2回のうち1回を別の活動にしてはどうか。岩沼の千年希望の丘での植樹イベントでは、非常に多くの人が集まると聞くが、木を植える、ということは楽しみややりがいを感じやすいのではないか。個人的には、以前から広瀬川に桜を植えることができないかと考えており、あくまでも植樹は一つの例にすぎないが、今よりもやりがいを感じる、楽しめる活動にシフトしいってもよいのではないか。

○長谷川委員

我々はウイスキーを造っている関係上、少し大げさな表現ではあるが、広瀬川をきれいにすることは企業活動の一つともいえる。しかし、そういったことだけでは、休日に社員を集めることは難しいのが現状である。我々は一斉清掃が終わった後に、社内でバーベキューを実施しているが、そういった楽しみを準備することで、社員だけでなく、その家族にも参加してもらえている。それをきっかけとして、清掃活動に参加した子供たちも、広瀬川の魅力や環境保全の大切さが、共通認識として広がっていけば理想的である。企業が参加するメリットをこちらから提供するのは、実際にはなかなか困難である。むしろ、それぞれの企業が独自にメリットとなるように工夫しながら参加できるようになればよい。

○深松委員

澱橋会場も、駐車場があり来場しやすいということもあり、ゴミの数に対して参加人数が多く、清掃活動に対するやりがいが少なくなってきている。アンケート結果を見ると、一斉清掃に参加することでもらえる活動証明書が参加理由としている企業が多いことがわかるが、例えば、創生プランに関係する他の事業、「広瀬川で遊ぼう」や「作並かっぱ祭り」などにスタッフとして協力すれば、一斉清掃と同じ証明書を出せるような仕組みにすれば、そちらへ回ってくれる企業も出てくるのではないか。

○宮原会長

継続的に市民会議の活動を支えるという考え方も大切な一方で、イベントベースで作業を分担することも、広瀬川市民会議の運営を支えていく一つの手法ともいえる。

○小祝会長代理

二本柳委員から「個人としての活動へつなげることが必要」という意見が出ている。1万人プロジェクトへのアンケート結果から、「個人や家族で楽しめる活動があれば参加したい」という傾向が読み取れることから、そういったニーズをつかむことで、新しい担い手の発掘や育成につながっていくのではないか。今回のアンケート結果を非常に重要なデータとして捉え、もう少し掘り下げて、どういった企画にニーズがあるのか、参考にできる意見を集めていってもよいと考える。また、多田委員の地域通貨や深松委員のホームページ上での公開という意見が出たが、現状として企業の論理が優先される活動であるからこそ、そういったインセンティブを与えることについても必要で、実現可能性について検討していってもよいと考える。

○高橋委員

現状は企業としての参加が多いが、CSR活動による参加だけでは限界があり、一定のライン以上にはならないのではないか。そこで、企業の参加をさらに促すきっかけとして、何か商業と関連する企画ができればよいのではないか。それをきっかけにして、参加した企業の家族や子供たちに対して、活動の理念や意義を知ってもらい、個人としての参加につなげていくことが重要である。

○佐藤委員（代理：加藤 悠司 氏）

広瀬川学校の報告書の中に、企業のCSR活動の一環として、講師を派遣して講習会を開催したという記載があったが、例えば、我々の管理河川でそのような活動を行うと、それに対して評価ポイントをつけることができるため、企業にとってはインセンティブになる。そういった仕組みは、積極的な企業活動には重要である。また、アンケート結果には、広瀬川の文化や歴史に関する講座への参加希望も多いことがわかったが、もしそういった企画を行う際は、国交省の出前講座の枠組みがあるので、必要であれば有効に活用して頂きたい。

○後藤委員

今の環境で何ができるか、という検討も重要だが、現状として広瀬川を身近に感じている市民が少ない中で、どうやって広瀬川を訪れる必然性を作れるかという検討が必要である。そのためには、ある程度の投資が必要で、例えば清掃に参加した人だけがバーベキューや芋煮が手軽にできるような設備を用意するなど、モデル地区のような形で実験的に行い、結果に応じて広めていくといったことができればよいと考える。

○深松委員

澱橋会場は、10年前は非常に参加者が少なかった。しかし、活動を続けていく中で、町内会の方や周辺の学校関係者の目に留まり、現在のような形につながっている。他の会場も含めて、まだまだたくさんの人に興味を持ってもらえる可能性は大いに秘めているので、様々な検討をしながら、継続していくことが大切である。

○宮原委員

これまでの議論を振り返ると、市民会議の組織体制強化という点では、プロジェクト、イベント単位で主役が交代すれば、事務局を担ってくれる企業も出てくる可能性も考えられるため、そういった仕組みづくりも検討していきたいと感じた。例えば、広瀬川で演奏したいという人はたくさんいるはずで、ジャズフェスを広瀬川実施できれば、そういったニーズに応えられる。いろんなイベントと広瀬川がコラボすることで、広瀬川を多くの人が訪れるきっかけになるのではないか。また、エリア単位でとらえることも大切で、町内会や市民センターの講座と連携して、それらの人たちに市民と広瀬川をつなげる窓口になってもらうことができればよいと考える。先ほどの後藤委員の意見にもあったように、実験的な形でもよいので、運営の方法も含めて、検証してみるといった活動も展開していってはどうか。

○長谷川委員

例えば、京都の鴨川は、多くの人が日常的に訪れたり、「川床」で食事を楽しむことができるなど、市民と川が密着している成功例であるといえる。そういったケースを参考にしていくことも大切である。

○工藤委員

私たちが子どもだった頃に比べて、近年は「川遊びは危険なもの」というような考え方が、親世代や学校関係者に広がり、川へ日常的に近づく子どもが少なくなったと感じていた。そのせいか、作並かっぱ祭りは、子供たちだけでなく親世代にも貴重な機会となっているようで、非常に需要が高いイベントであると自負している。そして、例えばトレイルランのようなイベントを開催すると、大盛況になると聞いたことがあるが、このところの流れは、再び自然に触れる機会を求める方向へ回帰してきているように思える。加えて、行政機関の河川管理の考え方も、規制するだけではなく、親しむ、利活用する方向へ変わってきたと感じている。その流れを確実につかみ、応えるようなメニューをつくっていく必要がある、と改めて感じた。本日、委員の皆様にはたくさんの意見を頂戴した。引き続き、よろしくお願いする。

○宮原会長

広瀬川市民会議の会長として、本日の議論を受け止めていただいた。本日、委員のみなさまより、非常に多くのご意見、ご提案をいただいた。内容については事務局で議事録にまとめていただき確認することして、本日の議事を終了したい。

＝一同了承＝

4. 閉会

○司会（安田課長）

今までは広瀬川市民会議の「組織体制」を強化することについて検討してきたが、本日のご議論を受けて、「活動」を活発化することで、広瀬川市民会議を強化していく、といった方向で整理していきたい。次回は3/23（木）を予定している。以上をもって「第32回広瀬川創生プラン策定推進協議会」を終了する。

以上